

## 曾慶豹著『約瑟和他的兄弟們：護教反共， 党国基督徒與台湾基要派的形成』

(ヨセフとその兄弟たち：台湾における護教反共運動，  
党国キリスト教徒，そしてファンダメンタリズムの形成)

高井ヘラー由紀

### はじめに

台湾の教会事情は複雑で把握しにくい。日本で比較的良好に知られている「台湾基督長老教会（以下、台湾長老教会）」は、清朝末期から日本統治期を通じてほぼ唯一の現地プロテスタント教会で、戦後は台湾内外で民主化運動や独立運動を牽引してきた存在である。1970年代には蒋介石率いる国民党政権と鋭く対峙、政治権力から圧迫を受けながらも繰り返し民衆の立場から政治的発言を行い、以降、現在に至るまで、政治の重要な局面に際して多くの声明を出すなど、台湾の社会問題に積極的に関わってきた。しかし、国民党政権を支持する教会やキリスト教徒は、そのような長老教会の信仰的立場について、政治の領域に踏み込んでいるとして陰に陽に非難してきた。特に1970年代が顕著であったが、現在でも一部の教会から「政治的で危ない教会」などと中傷され続けている現実がある。

台湾長老教会は、なぜ1970年代以降「政治的」になったのか、あるいはならざるを得なかったのか。この問いの背景には、台湾長老教会を

批判した側の教会やキリスト教徒の信仰こそが、実はきわめて政治的だったという事実がある。しかしその政治性は「純正信仰」（聖書の無謬性を信じる「聖書信仰」という言説によってカモフラージュされ、台湾キリスト教史研究における批判的検証の対象となつてこなかった。

本書はこの、台湾長老教会を批判した側のキリスト教徒、すなわち筆者が「党国キリスト教徒」と呼ぶ一群のキリスト教徒の存在に初めて真正面から斬り込んだ、画期的な研究である。筆者の曾慶豹はマレーシア出身の華人キリスト教徒で、博士号を台湾で取得後、台湾の中原大学を経て輔仁大学で教鞭をとっている。神学および哲学に関する著作が多数あり、西洋の神学のみならず「漢語神学」<sup>(1)</sup>に対する理解も深い。その筆者が、多様な一次資料を駆使し、台湾長老教会側でもそれを批判した側でもないアウトサイダーの立場から、台湾の教会関係者には難しかった党国キリスト教徒の検証を行った。それが本書である。

## 本書の構成と概要

本書の趣旨は1965年から1971年の間、いわゆる党国キリスト教徒が台湾キリスト教界の動向に与えた影響の検証と、その神学的政治的言説の分析である。構成は、序章、第1章「十字架上の党シンボル：蒋介石の護教反共論述」、第2章「イエスのために立ち上がれ：成文秀および張静愚の反共神学」、第3章「祈祷、反共、必勝：護教反共連合会の組織と活動」、第4章「1965年：合同から分裂へ」、そして第5章「党国キリスト教徒と台湾ファンダメンタリズムの形成」、である。第5章は他の章の2、3倍の分量があり、第1節「党国キリスト教徒と教会政治資本」、第2節「趙天恩と中華福音神学院」、第3節「党国化したキリスト教大学」、第4節「ブラックリストに載せられた『総統牧師』周聯華」、第5節「牧師的政治と政治的牧師」に分かれている（以上、原文中国語、

評者による翻訳)。

全体的にごくゆるやかに時系列で並んでいるといえなくはないが、構成そのものに系統だった意味づけはなく、章節ごとの内容も必ずしもタイトルに帰結する系統だった文章ではない。むしろ特定の資料、出来事、人物の検討に関する個々の文章を、ゆるやかにつなげる形で寄せ集めた感が強く、一次資料を掘り起こして検証した上の記述ではあるものの、研究書というよりはエッセー集的な色彩が強い。同じ章や節の中でも年代が前後したり、似たような記述が項目や章を超えて繰り返される部分も多くみられるのは、別々に発表した論文を収録したためであろう。出版するにあたり、頻出する人名、事項や用語については初出の際にきちんと説明するなど、統一感をもたせるための作業をもう少し丁寧に行うべきであった。言語は中国語であって、日本の研究者の多くにとって直接読解することは難しいと思われるので、以下、紙面を多めに割いて各章節の中心的趣旨をできる限り整理して紹介し、その上で、本書の意義および課題を簡潔に論じる。それによって今後の東アジアキリスト教史研究に新しい視点を提供したい。これが本書評を執筆する目的である。

### <序章>

今日の台湾キリスト教には二つの大きな神学的潮流がある。一つ目は台湾長老教会の「出頭天神学」<sup>(2)</sup>、二つ目は非長老教会の「擬似神学」である。前者は過去に被った痛みや苦しみを豊かさに変えようとする神学であり、後者は純粹な信仰や靈性を装って教会が政治に介入することを禁じる一方、執政者にすり寄って愛国主義を声高に唱える「党国キリスト教徒」の神学である。

この二つの神学的潮流の形成は1965年の台湾宣教100周年記念事業を発端としている。台湾長老教会による政治参与の姿勢と、「党国キリスト教徒」による「護教反共」(後述)運動とは、一見するとまったく別々

のものに思われるが、実は表裏一体をなしている。しかし、両者の決裂以来50年以上が経過した今日、両者の間には和解がもたらされるべきである。

## <第1章 「十字架上の党シンボル：蒋介石の護教反共論述」>

1965年10月、「アジアキリスト教護教反共連合会」(Asian Christian Anti-Communist Association, ACACA)が台湾で成立、この運動のネットワークは、「世界護教反共連合会」(World Christian Anti-Communist Association, WCACA)として中華民国台湾の範囲を超えて展開していった。この運動の中核的精神となったのが、蒋介石の「反共神学」である。蒋介石は「反共」(共産主義に反対する)と「護教」(聖書を絶対視するキリスト教を擁護する)を結びつけることで、キリスト教勢力を反共ひいては国民党による大陸奪回という政治目的の動力として積極的に利用しようとした。

反共主義および大陸奪回に加えて、三民主義や革命思想をもキリスト教と結びつけた蒋介石の信仰理解を絶対的教義として信奉したのが、党国キリスト教徒である。共産主義は宗教を否定し進化論や無神論を標榜するという理由で悪魔視され、共産主義下の「大陸同胞」の「受難」はキリストの受難と重ね合わせて説明された。大陸奪回のための闘いは、悪魔である共産主義を打倒するための信仰の闘い、すなわちキリスト対サタン、正義対悪、精神対唯物の闘い、そして共産主義からキリスト教を擁護する思想戦、「聖戦」、「十字軍」であった。その基地と位置づけられたのが、中華民国台湾だったのである。

蒋介石は、キリスト教徒にとって「反共」とは政治ではなく信仰的事柄であると主張し、キリスト教団体が反共工作に協力することを要請した。その際に重要な意味をもったのが、中華民国を支持し中華人民共和国の国連加入阻止を支持していた国際キリスト教協議会(International



写真1：本書の表紙（蒋介石生誕百周年記念式典の際に掲げられた，国民党シンボルを中央に据えた十字架）

Council of Christian Churches, 以下 ICCC)」の米国人牧師カール・マッキンタイア（Carl McIntire）との関係である。

蒋介石は、聖書および『荒野の泉』（Streams in the Desert）<sup>(3)</sup>を愛読した敬虔な信仰者とされる。しかし実際には、『荒野の泉』を「精神革命」のために格好の書物と考え、自分のメッセージとともに人々に読ませようとしたのである。

蒋介石没後の1986年、誕生100周年感謝礼拝が一部のキリスト教徒によって祝われた。その祝賀会の席でステージの真正面に掲げられた十字架には、中央に国民党のシンボルが据えられている（写真1参照）。この十字架は、「党国キリスト教徒」の主張する「純粋な信仰」が、実質的には「反共の信仰」、孫中山や蒋介石に従う「政治的正しさ」を追

求したものであったことを端的に示していた。

## ＜第2章 「イエスのために立ち上げれ：

### 成文秀および張静愚の反共神学＞

成文秀は、蒋介石によって創始された「護教反共」キリスト教を聖書の、教会史的、神学的に理論づけたといえる人物である。山東華北神学院およびプリンストン神学校で神学を修め、台湾聖經学院（現真道教会聖經学院）副院長をつとめるなど神学的背景をもつ一方、軍人としても国防医学院政戦部主任などを歴任、1969年には党務顧問に就任している。反共連合戦線を強く意識したキリスト教理解に基づき、『角声週刊』を創刊して「護教反共」の論説を担当、ICCC 機関紙の文章を多く翻訳している。ICCC 副会長、同中華民国分会会長として国内外の反共活動に従事、上述の ACACA や WCACA でも幹部をつとめるなど、護教反共キリスト教のイデオロギーを最も積極的に宣伝し、『護教反共叢談』をも著している。

その論述の中でも重要なのが世界教会協議会（World Council of Churches, 以下 WCC）批判である。WCC はエキュメニズムの名の下にバベルの塔を建てようとする試みであり、終末には必ず神の審判を受ける、また WCC は世界合同教会や世界合同政府の設立を企てているため、共産主義による世界征服を促すと主張した。WCC を大異端的組織、偽預言者、サタンに属する勢力など批判する一方、ICCC を「純正信仰」を擁護する団体であると礼賛した。WCC と並んでカトリック教会も同様に批判された。

張静愚は成文秀と並ぶ「反共神学」のオピニオンリーダーであった。神学の素養はなく、マッキンタイアの反共神学を模倣している。ただし、張静愚が最も重要視したのは正統信仰ではなく党国意識や反共意識の有無であった。共産主義をサタンの頭と見なし、護教反共キリスト教徒の

曾慶豹著『約瑟和他的兄弟們：護教反共，党国基督徒與台湾基要派的形成』

唯一の任務はキリストに従って共産党という悪魔と戦うことであると主張、教会はその戦いの「大本営」と見なされた。「愛国」「反共」「護教」「復国」「擁蔣」が同一視された。「擁蔣」は「愛蔣、崇蔣」となり、蔣介石没後はキリスト教界において蔣を神格化する動きさえみられた。

中華人民共和国では「反帝」と「愛国」が唱えられたが、台湾では「反共」と「愛蔣」が唱えられた。教会は中華人民共和国では三自愛国協会と家庭教会に、台湾では愛国愛教の党国キリスト教徒と「親共」のレッテルを貼られた長老教会とに分かれた。中華人民共和国では帝国主義との断絶を目指す反帝神学が展開され、台湾では「指導者に従って国家を守る」反共神学が展開された。

### <第3章 「祈祷、反共、必勝：護教反共連合会の組織と活動」>

『真道手冊』（中国信徒佈道会）は台湾内外の華人教会に大きな影響を与えた書物である。著者の王永信は北京出身のキリスト教徒で、1949年に中国を離れ、米国を経て台湾に渡った。『真道手冊』ではカトリック教会、エキュメニズム運動、WCC、台湾長老教会のいずれもが異端として糾弾されており、護教反共論述におけるWCC批判はほぼこの書物に倣っている。王永信は党国キリスト教徒と深いつながりを有していたが、その存在についてはまだ明らかになっていない部分が多い。

アジア護教反共会議が台湾で初めて開催されたのは1962年である。ここにおいて護教反共の目的は、1) 国外の反共勢力と手を組んで島内の反共意識を集結すること、2) 中共の国連加盟を支持するWCCに対して、反共勢力を浸透させること、3) 共産党と同路線の者が政治に関与することを防ぐこと、4) 純粋な信仰を擁護し、異端を攻撃すること、とされた。マッキンタイアはその前年に蔣介石と知り合い、台湾における護教反共運動の展開に甚大な影響を与えている。

この後に成立したWCACAでは、「真の教えのための美しい闘い」



が標語として採用され、「護教反共」に関する六項目の信念が採択された。護教反共運動は台湾のみならず韓国や日本でも多くの支持者を得て、アジア平信徒連合会（Asian Lay-Christian Association）やキリスト教反共十字軍（Christian Anti-Communism Crusade）、反カトリックの運動などとして展開された。

この動きに対し、台湾長老教会、台湾聖公会、中華基督教衛理公会（メソジスト教会）、基督教台湾信義会（ルーテル教会）の四派は1965年、『教会合一性：正告主内弟兄姊妹們』（教会の一致：主にある兄弟姉妹に告げる）を著してエキュメニズムの意義を主張した。しかし張静愚は反WCCの立場から猛烈に反駁、1966年にはアジア護教反共会議と密接な協力関係を有する「国民党中央第五グループ」が、WCC案に関する委員会として政府内に成立することとなった。

#### <第4章 「1965年：合同から分裂へ」>

1965年は「基督教來台宣教百周年記念大会」（6月16-22日）が台湾長老教会によって挙行された年である。事実上台湾のあらゆるキリスト教会が招待されたこの式典は、その一部始終を中華民国外交部（外務省）内の「宗教聯繫補導小組會議」（宗教連絡指導班）によって厳しく監視されることとなった。原因は、上述の四大教派の代表が、同年2月13日に連合記者会見においてエキュメニカル運動への支持を表明したことにある。マッキンタイアは即座に台湾に渡航して記者会見を行い、エキュメニカル運動に反駁する小冊子が間もなく刊行された。宣教百周年を祝い教会合同運動を促進するはずだった式典は、白色テロの下、長老教会および非長老教会の「分裂運動」になってしまったのである。式典翌年の1966年には、カトリック教会との連合祈祷会が台南において開催されたが、これも王永信に代表される護教反共勢力に激しく糾弾された。

式典終了後、黄彰輝をはじめ、黄武東、宋泉盛（C. S. Song）ら長老



曾慶豹著『約瑟和他的兄弟們：護教反共，党国基督徒與台湾基要派的形成』

教会指導層は政府の圧力下で次々と出国し、台湾に戻ることができなくなった。非長老教会でも、エキュメニカル運動を推進した台湾信義会創設者の金仲庵は、同教会内で「反共伝道者」と糾弾され、香港に逃亡している。

1965年以降、政府は台湾キリスト教界をWCCから引き離すため、台湾長老教会に対してWCCを退出するよう圧力をかけた。台湾長老教会が立ち上げたWCCに関する勉強会は「反共推進委員会」という名称に変更され、同委員長で総会議長でもあった謝緯は1970年6月に交通事故で死亡、その一ヶ月後、台湾長老教会はWCC退出を可決したのである。

## <第5章 「党国キリスト教徒と台湾ファンダメンタリズムの形成」>

### 第1節 「党国キリスト教徒と教会政治資本」

蒋介石がキリスト教徒だったことは、キリスト教に対する寛容ではなく、むしろ不寛容を生み出した。蒋介石を中華民族の救世主、世界的偉人、預言者、使徒、思想的リーダーと奉じる党国キリスト教徒は、特定の教派や神学ではなく国民党への忠誠心や反共イデオロギーに依拠し、次第にファンダメンタリズムの様相を呈していった。このファンダメンタリズム勢力は権力にすり寄って護教反共勢力と共に成長し、分離主義（separatism）的の神学的立場から他の神学的立場を激しく糾弾した。

中原大学を創立した張静愚は、死去するまでの30年間その理事長をつとめた。国際ギデオン協会や「国際基督教徒従業人員団契」（CBMC: Christian Business & Marketplace Connection）をも創設し、ACACAおよびWCACAの理事長を経験、政治界およびキリスト教界双方において最重要ポジションを歴任した。その腹心ともいえる呉嵩慶と黎世芬は張静愚の関与する組織の理事などをつとめた。また、張静愚と親密な関係にあった宣教師の柯希能（Nicholas Krushnisky）は以琳教会（今

日の以琳基督徒中心)を設立している。

張静愚は国民党職には就かなかったが、蒋介石およびその側近らと親しかつた。中原大学以外にも東海大学および中国文化大学の設立に関与、1966年には中国文化大学中華学院に反共イデオロギーに基づく「キリスト教研究所」を設立し、「護教反共神学院」ともいえる神学コースを1976年に発足させている。国民党務員、軍関係者、地方有力者と友好的関係を築き、名実ともに絶大な影響力をもつ党国キリスト教徒の「元老」、台湾キリスト教界の最高権力者、宗教裁判官、いわば台湾の「吳耀宗」<sup>(4)</sup>であった。

## 第2節 「趙天恩と中華福音神学院」

中華福音神学院は台湾ファンダメンタリズムを擁してきた福音派系の神学教育機関である。創設者の趙天恩は、マルクス主義を打倒できる神学者の養成を願う牧師である父の志を受け継ぎ、1965年に中国大陸から台湾に渡った人物で、1970年に中華福音神学院を創設した。表面的には中国の本色化（土着化）神学教育を追求したように見えるが、実際には政治的イデオロギーを強く有していた。

1971年、「フランクフルト宣言」<sup>(5)</sup>起草に関わったドイツの福音派宣教学者ピーター・ベイヤーハウス（Peter Beyerhaus）を迎えて、台南神学院で宣教シンポジウムが開催された。この際、趙天恩は席上でWCC反対の立場から意見を述べ、その後『基督教論壇』に「出席者の7割がフランクフルト宣言に反対の立場だった」などと投稿、いわば台湾の神学教育史における福音派と自由主義神学派の分裂とでもいいうべき状況がここに生み出された。

趙天恩は、台湾長老教会の「危険な」神学教育路線に対して反撃することを中華福音神学院の使命と考えていた。台湾を含む中国教会は本色神学を提唱すべきであり、福音派キリスト教徒がアジア神学教育の方向

曾慶豹著『約瑟和他的兄弟們：護教反共，党国基督徒與台湾基要派的形成』

を導くべきと信じ、聖書無謬主義を提唱した。

### 第3節 「党国化したキリスト教大学」

東海大学は、1949年に中国から宣教師が撤退したのち、中国にキリスト教大学を設立するための海外基金会在がWCCとつながりを有していたため、黄彰輝、黄武東、ダニエル・ビービなどの台湾長老教会関係者が全面的に協力して、1953年に設立されたキリスト教大学である。しかし理事会には張靜愚をはじめとする反WCC派の関係者もあり、国民党政府の監視下で校長などの人事が政治的理由で決定されるなどし、1957年には張靜愚が理事長に就任、長老教会の影響力は1965年を境になくなっていった。

一方、中原大学は米国人宣教師のジェームズ・グラハム（James R. Graham）が1955年に創設した。すでに東海大学設立後だったにもかかわらず、「中国唯一のキリスト教大学」と標榜されたのは、WCCに連なる長老教会やキリスト教高等教育連合理事会（UBCHEA）<sup>(6)</sup>などの外国勢の影響をなくすことが設立の目的だったからである。中原大学の理事は党国キリスト教徒、地方士紳、外国宣教師からなっていたが、張靜愚のクリスチャン友人でなければ国民党関係者であった。少しでも自由主義的なキリスト教の要素をもつ人間は長くはいられなかった。

### 第4節 「ブラックリストに載せられた『総統牧師』周聯華」

1965年2月、上述の四大教派による記者会見が行われ、同年10月にACACAが成立する動きの中で、WCCと関係をもとうとする16のキリスト教団体および主要なキリスト教指導者は、台湾省刑警務処が成立させた「七二〇案」によってブラックリストに載せられた。そこには長老派牧師に混じって、蒋介石夫妻が礼拝を守る凱歌堂<sup>(7)</sup>専属牧師の周聯華の名前も含まれていた。周聯華はバプテスト派の牧師にもかかわら

ず WCC やカトリック教会との連合祈祷会に関心をもち、「私人」としてエキュメニカル運動に従事、1965 年記念式典の際には準備委員会主席をもつとめている。中道路線のキリスト教雑誌『基督教論壇報』を創刊するために許牧世<sup>(8)</sup>を担ぎ出し、上述の四大教派の協力を取りつけた。さらに台湾長老教会が 1971 年末に発表した「国是声明」<sup>(9)</sup>の起草にも関わっている。一方、護教反共運動や国民党関係の要職はことごとく巧妙に断っていた。そのため、常に国安局や警備総部から監視され生命の危険にさらされていたが、凱歌堂の牧師だったため宋美齡と中華婦女祈祷会のメンバーに守られていたのである。

### 第5節 「牧師的政治と政治的牧師」

反共神学最後の神学思想者といえるのが、米国カルフォルニアの中華婦主神学院<sup>(10)</sup>院長だった趙君影である。反共主義は政治の問題であって信仰の問題ではないとする立場に対し、その代表的論述「反共的屬靈性（反共主義の靈性）」（1971 年）において反駁論議を展開した。また、蒋介石逝去後に著した小冊子 *President Chiang Kai-shek as a Christian*（キリスト者として蒋介石総統）において、蒋介石を中華民族四千年の歴史で最初のキリスト教徒の国家指導者と高く評価している。護教反共連合会の活動後期に活躍した思想家は趙君影のみであり、彼の議論が台湾ファンダメンタリズムの土台になった。台湾内の党国キリスト教徒同様、台湾長老教会の神学教育、台湾独立運動、WCC などを批判し、台湾教会は米国のメイチェン型ファンダメンタリズムに立ち返るべきであると主張した。また、中国大陸と共産党に福音を伝えるべきであると強く主張した。

台湾長老教会「七星中会」<sup>(11)</sup>双連教会牧師の陳溪圳は、日本時代は皇国キリスト教徒、国民党時代は党国キリスト教徒として影響力を有した大人物である。ただし回想録などの資料には彼の思想や神学を示すよう

な記述は一切なく、踏み込んだ研究はできていない。

党国キリスト教徒は、蒋介石の死後、「聖介石堂」を建設することを構想、1989年に宋美齡の支持を取りつけて、現済南教会（元台北日本基督教会）の隣に「反共，反台独，全国教会の団結と協力を促進する教会総部」として「中正記念教会」を建設することを極秘のうちに画策した。が、この計画は実現しなかった。

党国キリスト教徒や政治的牧師は、国民党の権威主義的体制と恐怖政治の圧迫下、故郷を失ったという精神的条件も手伝って、政治権力に強烈に依存するかたちで一種の敬虔主義、あるいは終末的信仰を追求した。エキュメニズムやWCCを一貫して不純な信仰と決めつける傾向は海外の華人教会にも広まった。そのため華人教会は解放の神学から距離を置き、ローザンヌ世界宣教会議<sup>(12)</sup>の誓約文書を翻訳する際にも、「解放」「革命」「社会」などの用語は訳さないか、「自由」や「政治行動」などに改ざんするなど、護教反共イデオロギーに支配されていたことがわかる。

中国大陸出身のキリスト教徒すなわち党国キリスト教徒は、多くが軍人の背景を有していた。あるいは共産党との闘いに敗れた心の傷を、護教反共運動を通して癒していたのかもしれない。これはヨセフとその兄弟たちの悲惨な歴史の一コマなのである。護教反共運動の強い影響を受けて形成された台湾ファンダメンタリズムは、権力を迷信的に信じ、思想を封じ込める性格を強く有することとなった。1965年の宣教百周年記念大会から1989年の中正記念教会堂計画頓挫までの間に、台湾キリスト教界内の分裂は決定的になった。救済史は痛みの歴史と並行するが、悔い改めなくして本当の「合同」はできない。台湾キリスト教における靈性の問題は政治的な傷なのである。ヨセフとその兄弟は未だにお互いを認め合っておらず、ヤコブの子供達は未だに一種の靈的無知の中で自分たちを騙し続けている。

## ＜本書の意義＞

本書の主題はかなり多岐にわたっており、さまざまな角度からその学問的意義や貢献を検討することができるが、ここでは主に台湾キリスト教史および東アジアキリスト教史研究の文脈から具体的に四点だけ述べてみたい。

第一には、台湾において長らく放置されてきた「非長老教会」の神学的思想的傾向を、蒋介石、成文秀、張静愚、王永信、趙君影などの代表的「神学者」あるいはオピニオンリーダーの言説分析を通して、初めて批判的に検証したことである。これまでの台湾キリスト教史研究では主要な研究対象は台湾長老教会であった。戦後に開始した教会群に関する研究は少数存在するものの、大方において蒋介石政権になびいたこれらの教会群は政治や社会問題に関して沈黙していたため、神学的傾向などについては検討されてこなかった。そのような中で反共、護教、蒋介石絶対化、WCC および長老教会の敵対視、ファンダメンタリズムといった中心的要素を正面から取り上げ、今日の非長老教会や海外華人キリスト教徒の信仰的傾向とのつながりを指摘したことは、台湾キリスト教（史）研究において計り知れない意義を有している。ところどころ否定的評価に傾きすぎているように思われる部分もあるが、それを補って余りある貢献である。今後、本書を出発点としたさまざまな新しい研究が生まれてくるであろう。

第二に、当時の台湾キリスト教界が、戦前の皇民化運動の状況にも似て、反共主義と蒋介石への忠誠を常に求められる状態にあり、教会はそのような忠誠心を明らかにする努力を常に最大限に行わなくてはならなかったこと、そして同時に党国キリスト教徒が、政治的にも信仰的にも自分たちのイデオロギーになびかない台湾長老教会およびエキュメニカル運動に圧力をかけ続け、その際に政治的な力を利用したという事実を、部分的にでも資料を用いて示したことである。これは歴史研究における



貴重な貢献であり、今後さらに明らかにされていくと思われる。

第三に、第一点とも関連するが、戦後東アジアにおいて展開されたが忘却されつつあった「護教反共」運動をクローズアップして取り上げたことである。この護教反共運動は一時的に相当の影響をもっていたと思われるが、運動が下火になって以降、その歴史をあえて記録または記憶しようとする者はなく、護教反共運動に関する情報はインターネット上にもほぼ全く存在しない。キリスト教研究が盛んな韓国ではあるいは異なるかもしれないが、私見の限り、日本でこのテーマを取り上げたキリスト教史研究は存在しない。「護教反共」運動が復活することはまずないと思われるが、似たような精神構造をもつ別の信仰／政治運動として再燃する可能性は大いにあり得る。護教反共運動に関する資料を発掘して運動の全容に迫り、この運動の本質について緻密な検証が行われることが、今後も必要な作業であると思われる。

最後に、これも第一点と関連するが、華人キリスト教研究への視点を提供したことである。今日の世界における華人キリスト教の影響力は大きい。しかし、華人教会は WCC につながる類のキリスト教信仰を一貫して危険視あるいは無視し続けてきた。良く言えば西洋的キリスト教の神学（思想的枠組み）に影響されない「本色」化した中国的キリスト教の追求といえるが、悪く言えば思想の自由を制限することでキリスト教伝道に特化しようとする動きである。その象徴的存在ともいえる「世界華人福音運動」（華福会と略）を研究対象として取り上げたのは、私見の限りモリカイネイのみである<sup>(13)</sup>。本書において、華福会を含む華人キリスト教運動と「護教反共」運動の精神性とのつながりが指摘されたことで、今後もプレゼンスを増し続けるであろう華人教会に関する研究への手がかりが示されたことは貴重である。



## <課題>

本書は多くの一次資料を読み込んだ研究であるとはいえ、学術書の体裁はとっておらず、むしろ一般の読者でも読めるように書かれた、未踏の分野に関する啓発の書あるいは告発書という色彩が濃い。したがって、厳密に学術的な批判をすることは必ずしも適当でないかもしれないが、今後の研究の進展のために、比較的大きな課題だと思われる点をいくつか指摘しておきたい。

第一に、本書最大のキーワードである「党国キリスト教徒」について、きちんとした定義がなされていない。本書に登場する幾人かの人物がその代表あるいは典型であることは理解できるが、「国民党への忠誠心や反共イデオロギーに依拠する」程度の説明だけでは、キリスト教徒群のどこまでを「党国キリスト教徒」と理解すべきかを判断することは難しい。このタームが一人歩きすることがないためにも、ある程度きちんとした定義や説明がなされるべきである。本書で取り上げた人物にしても、例えば日本時代を経験した台湾人牧師の陳溪圳は、表向きには党国キリスト教徒の行動や言説に従っているものの、明らかに張静愚や成文秀ら大陸出身者とは異なっている。主に行動面から「党国キリスト教徒」と分類するのか、それともイデオロギー信奉の度合いから分類するのかなど、もう一步踏み込んで検討をすることで「党国キリスト教徒」の内実がより明確になり、その多様性や境界線も明らかになるであろう。

第二に、歴史叙述の不足である。本書は1965年(宣教百周年記念式典)から1971年(台南神学院における宣教シンポジウム)という時代を扱い、1965年が長老教会と非長老教会「分裂」の年だと強調している。しかし、このステートメントに関する歴史的検討はほぼ全くみられない。1965年が「分裂」の年、あるいは分裂の始まりであるという指摘は興味深いだが、本書では台湾における教会合同運動に関して、1965年の記者会見と小冊子発行にしか言及がなされておらず、そこに至るまでとそ

の後の歩みの検証がないため、「分裂」の内実はわからない。また、もう一つの軸である護教反共会議／運動についても、たとえば開始点をいつととらえるべきか、「後期」とはいつを指すのか、など、基本的な歴史が整理されていない。歴史専門ではない筆者に本格的な歴史研究を期待することはできないが、これは今後補完されなければならない作業である。

第二点との関連で第三点として指摘したいのが、仮に1965年が「分裂」の年だとしても、台湾におけるエキュメニカル運動はまだ継続されていたという事実である。評者の研究によれば、1960年に「基督教会工作座談会」という名称の下で台湾のエキュメニカル運動を開始した一群の教会、キリスト教団体、および個人は、1965年以降も「教会合作委員会 (Ecumenical Cooperative Committee)」など名称を変更しつつ、エキュメニズムの精神で活動を継続していた。しかし1971年、共同の声明書を発表しようとした際、政府から圧力をかけられた非長老教会が署名を拒否したため長老教会が単独で声明を出す結果になり（いわゆる「国是声明」）、ここにおいて「分裂」が決定的になったのである。実際これ以降、台湾におけるエキュメニカル運動は表面的には継続されながらも、中身はエキュメニズムとは全く関係のない事柄に終始することとなった。本書ではこのエキュメニカル運動については一切触れていないので、評者の論文を補完的に読んでいただければと思う<sup>(14)</sup>。

最後に、護教反共運動、あるいは党国キリスト教徒の信仰面に関する評価の問題である。筆者は党国キリスト教徒のキリスト教信仰について、信仰というよりは政治だったというニュアンスでかなり否定的な評価を下している。しかし、政治的色彩を強く有していたとしても、結果的に台湾におけるキリスト教の展開に貢献してきた部分もある。批判は絶対になされなくてはならないが、党国キリスト教徒の信仰における肯定的側面を一定程度認めないと、筆者自身も願う両陣営の「和解」にもって

いくことは難しいだろう。

### <最後に：今後のキリスト教史研究に向けて>

本書は反共イデオロギーに極端にとらわれていた党国キリスト教徒の批判的検証が主眼であるため、反共イデオロギーを信奉したキリスト教の否定的側面が前面に出されている。しかし実際のところ、1980年代までの東アジアの文脈において、共産主義が提示する理想とキリスト教はどのように向かい合ったらよいのか、という問いは非常に重要な信仰的思想的課題であった。党国キリスト教徒が二元論的価値観に基づいて共産主義を単純に悪魔視し、信仰と政治の領域を分離せずに台湾のキリスト教界に間違った圧力をかけたことは確かに批判されなければならない。しかし、それとは別に、この時期のキリスト教が実際、共産主義との対話の中で自己変容を迫られた、すなわち共産主義思想の影響を受けていた部分もあったということも指摘されなくてはならないだろう。WCC的信仰態度が共産主義に対するキリスト教の一つの応答であるとするれば、党国キリスト教徒に象徴される反共主義は共産主義に対するキリスト教の別の応答であった。イデオロギーの下にはより深い神学的課題が存在している。今後、両陣営が意味する神学的態度についての学術的理解が深まることを期待したい。

### 註

- (1) 漢語を用いた、主に中国発の神学の総称。
- (2) 台湾における解放の神学にあたる。
- (3) レター・カウマン著のデポジション書。
- (4) 社会主義体制下中国において、三自愛国運動委員会主席として教会の確立につとめた人物。
- (5) “Frankfurt Declaration on the Fundamental Crisis in Christian

曾慶豹著『約瑟和他的兄弟們：護教反共，党国基督徒與台湾基要派的形成』

Mission”：WCC ウブサラ大会（1968年）において採択された人道主義的キリスト教宣教師解に対し疑問を感じた一群の福音派宣教師が作成した宣教宣言。

- (6) United Board for Christian Higher Education in Asia, 中国語では亞洲基督教高等教育連合董事会。
- (7) 台北市内の蒋介石官邸内にある蒋介石夫妻専用チャペル。
- (8) 廈門出身で米国在住のキリスト教文学者。この後、東海大学（台中市）と台南神学院で教鞭をとり、「現代中文聖經」編集委員もつとめた。
- (9) 正式名称「台湾基督長老教会対国是の声明與建議」。ニクソン米大統領による中華人民共和国訪問を受けて、台湾の運命を決める権利は台湾住民が有することを台湾内外に対して訴えた。
- (10) 現中華婦主趙君影神学院（英語名称：Chinese for Christ Calvin Chao Theological Seminary）。
- (11) 台北市にある中会。
- (12) 1974年、スイス・ローザンヌで開かれた世界伝道のための国際会議。150カ国以上から福音主義指導者が集まり、その後の福音主義教会の歩みに大きな影響を与えた。
- (13) モリ、カイネイ「『華人系プロテスタント教会』研究の手掛り：『世界華人福音運動』を通して」、『アジア・キリスト教・多元性』第10号、現代キリスト教思想研究会発行、2012年3月、19-36頁（<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/154772>）、最終閲覧日：2019年10月25日。
- (14) 高井へラー由紀「戦後台湾キリスト教界における超教派運動の展開と頓挫—分水嶺としての『国是声明』と歴史観の相剋—」『キリスト教史学』第69集、2015年7月、74-110頁。

